

11・学生による被災民俗資料のバックデータ収集活動

加藤 幸治 東北学院大学 文学部 准教授

1. 企画の経緯

東北学院大学博物館では、文化財レスキュー事業における一時保管施設として、石巻市教育委員会所管の「鮎川収蔵庫」の考古・民俗・地学資料を一括受け入れた。平成23年度は一次洗浄と収蔵を行い、10か月間で民俗資料約4,000点、考古・地学資料平箱60箱に対する作業を大学生（本学のほか11大学の学生のべ約700名参加）が行った。今年度は、こうした資料の保全作業として二次洗浄を行いつつ、2つのイベントの開催によって、救援した資料から牡鹿半島の暮らしの歴史を構成し、その資料的意義を再認識してもらう活動を企画した。「鮎川収蔵庫」資料は、民俗資料を主体とするコレクションであるが、民俗資料に不可欠なバックデータ、すなわちどのように製作され、生活のなかで使われてきたかを知るデータが失われている状態である。資料の性格上、バックデータの欠落は民俗資料の価値そのものに関わるので、展示会場で民俗学専攻の学生たちが、来場した人々への聞き書きを行うことによってデータ収集を行った。



石巻市鮎川収蔵庫からレスキューされた資料

展示は、まず8月に、被災地である牡鹿半島あるいは石巻市において小規模な移動博物館による展覧会（以下、鮎川展）を開催し、バックデータ収集した。次に、11月に、

仙台市中心部の文化施設を会場に、中規模な展覧会を開催し（以下、仙台展）、バックデータを収集した。仙台市内には、被災地から多くの人々が避難・移転しているからである。

この2つの展覧会は、一般の展覧会とは全く性格が異なるものである。資料を陳列し、それを市民にみてもらいながら、学生が聞き書きをするという調査プロジェクトである。この活動は、資料の現地への返却までの3年間（予定）に渡って継続的に実施する予定である。収集した民俗資料のバックデータは、被災文化財の資料台帳に蓄積し、データベース化する。一時保管している資料を返却する際には、その台帳・リスト・データベースを資料とともに提供し、今後のコレクションの活用にかかしてもらおうと考えている。

なお本稿は加藤が文責を負うものであるが、以下2と3の文章は、東北学院大学民俗学実習文化財レスキュー班の学生による文章を加筆修正したものである。

2. 文化財レスキュー展 in 鮎川

平成24年8月12日（日）から14日（火）の3日間、津波で被災した石巻市牡鹿公民館を会場に「文化財レスキュー展 in 鮎川」を開催した。この展覧会では、震災によって鮎川で被災した資料500件の中から約40件を展示した。展示のチラシは、牡鹿半島の仮設住宅を含む全戸に配布し、来場を呼びかけた。

「文化財レスキュー展 in 鮎川」の目的のひとつは、資料を現地で展示することで、民俗資料に関する情報を集めることである。被災した資料の大部分は破損が激しく、用途が分からないものが数多く存在するからである。そこで、洗浄作業が終了した資料を、収集された現地に展示し、以前それを使用していた住民から、資料に関する情報を提供していただく場として、展覧会を開催した。

展覧会は3日間で約150名が来場し、約70名に聞き書きを行った。学生たちは、被災地での聞き書きは初めて



「文化財レスキュー展 in 鮎川」手作りチラシ

のことだったので、最初は話しかけ方もわからず、とても戸惑っていた。しかし、何人かに話を聞いていくなかで、どのように話しかければよいのか、どのような話題を投げかけると来場者も話しやすいかなど、少しずつコツが掴めてきた様子であった。また、聞き書きをしながらとるメモのとり方も、段々ときこちなさがとれていった。



展示会場（鮎川）で聞き書きをする学生たち

展覧会には仮設住宅や流されずに残った住宅に住む地元の人だけでなく、ボランティアの人や、他県から来ている人も多く来場した。開催期間が盆期間にあわせてため、帰省した家族連れもみられた。聞き書きの内容は、資料の使い方や作り方といったデータだけではなく、地元の人の思い出話、震災当時の様子、これからの鮎川についてなど、多岐にわたった。聞き書きによって収集されたデータは、その日の夜のうちに、この展覧会のために作った「聞き書きシート」にまとめ、蓄積していった。

展覧会2日目には、聞き書きのほか学生が主催した子ども向けの〇×クイズ大会のほか、企業ボランティアとの協働で映画上映会と紙粘土細工のワークショップを開催した。これは、楽しい思い出を残してもらうことで、来年現地で行う展覧会にも足を運んでもらうことがねらいであった。展覧会3日目は、午前中のみ聞き書きを行い、午後は撤収を行った。展示品の梱包作業は主に2人一組で協力して行うが、これは学生の学芸員的技術の訓練としても位置付けている。

聞き書きは会場の外にも展開していった。近くの仮設商店街「おしかのれん街」では、鮎川の祭りの様子や震災前の鮎川の様子について多くの人々が学生に話をしてくれ、データとすることができた。

3. 文化財レスキュー展 in 仙台

平成24年11月6日(火)から8日(木)の3日間、仙台市内のせんだいメディアテーク1階オープンスクエアにて「文化財レスキュー展 in 仙台」を開催した。この展覧会では、震災によって石巻市鮎川で被災した資料500件の中から約200件を展示した。仙台市には震災後、被災地から多くの方々が避難しているため、より多くの方から資料についての情報を聞くことができた。バラバラに避難したため、同じ集落の人々が震災後初めてこの会場で再会するといった場面も見られた。また、東京や関東近県に震災後移り住んだ牡鹿半島出身者も数名駆けつけた。

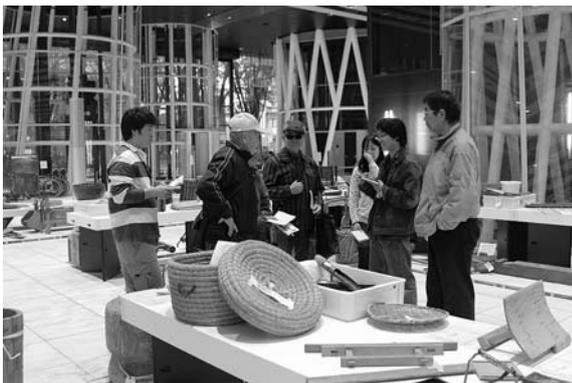
仙台展では、こうした牡鹿半島にゆかりのある人々だけでなく、文化財レスキュー活動を知らない一般の方も多く来場した。文化財レスキュー活動そのものの理解を得ることも、仙台展の目的の一つであった。会場では、宮城県被災文化財等保全連絡協議会が作成した、各地の救援活動を紹介する写真パネル展「救え！故郷の証一つながれ！MIYAGIー」を同時開催した。大きな壁面には、鮎川収蔵庫の現地での文化財レスキューからクリーニングの過程までを編集した映像を流した。

仙台展は約200件の資料を持ち込むため、梱包作業を1週間前から行う規模になった。前日には、美術品運搬専用の2tトラック3台分の資料を会場へ搬入、梱包を解き、聞き書きを行いやすいようレイアウトした。

開会後は、ひっきりなしに訪れる来場者に学生がシフトを組んで聞き書きを行い、情報を集めていった。初日は雨のせいか来場者はそれほど多くなかったが、テレビ各社を



「文化財レスキュー展 in 仙台」チラシ



展示会場（仙台）で聞き書きをする学生たち

はじめ多くの報道機関が訪れ展示会を紹介するため、2日目以降は来場者が増加し、最終的には3日間で2,300人を超える来場者があった。開催期間中も、聞き書きのしやすさ、安全性、資料状態を考慮しながら資料のレイアウトを徐々に変更していった。最終日には一日かけて資料を梱包・搬出し、会場の撤収作業を行い、仙台展は無事に幕を閉じた。

来場者によって展示の捉え方は様々で、展示した資料の使い方を実演する人、資料を見てそれにまつわる思い出話を語ってくれる人、資料をスケッチする人など様々であった。その中でも来場者の多くが「これは何だろう」と口々につぶやいたのは、大きなカゴの資料であった。これに対しては、生簀や魚を採る道具など見る人によって様々な意見が出た。なかには、展示資料の番号を値段だと思って購入しようとする人もあり、趣旨を説明するといった場面も

あった。最終的には、370人あまりの人々から聞き書きのデータを得ることができ、これも「聞き書きシート」に蓄積した。

仙台展も、資料に関する情報を収集するという目的は鮎川展と変わらない。本展示会においても来場者の方々からは、資料に関するお話はもちろんのこと、自分自身のこと、被災当時のこと、故郷のことなど、多岐にわたる内容の話を伺うことができた。鮎川展との違いとして、来場者間に生まれた関係性が挙げられる。鮎川展では近所に住んでいる、もともと友人であるという関係が多いためか、個人個人のつながりが強いという印象を受けた。それに対し、仙台展ではそれぞれ別々の地域から来場した互いを知らない人々が、あたかも昔からの友人であるかのように展示物やその時代についての会話を楽しんでいるといった場面が目立った。あちらこちらで新たな関係性や一時的な価値が、生まれては消えてゆくような空間がそこに生まれた。

今後、この展示は2年間という長いスパンをかけて継続する予定である。私たちは、被災文化財を陳列し、人々に見てもらうなかで得られるデータを記録・整理する取り組みを通して、文化財レスキューの段階から、通常のミュージアムのコレクションによる価値創造という新たな段階にシフトする足掛かりをつかみたいと考えている。